

【旧約聖書日課】イザヤ書 65章17～25節

- 17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。
初めからのことを思い起こす者はない。
それはだれの心にも上ることはない。
- 18 代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。
わたしは創造する。
見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして
その民を喜び楽しむものとして、創造する。
- 19 わたしはエルサレムを喜びとし
わたしの民を楽しみとする。
泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。
- 20 そこには、もはや若死にする者も
年老いて長寿を満たさない者もなくなる。
百歳で死ぬ者は若者とされ
百歳に達しない者は呪われた者とされる。
- 21 彼らは家を建てて住み
ぶどうを植えてその実を食べる。
- 22 彼らが建てたものに他国人が住むことはなく
彼らが植えたものを
他国人が食べることもない。
わたしの民の一生は木の一生のようになり
わたしに選ばれた者らは
彼らの手の業にまさって長らえる。
- 23 彼らは無駄に労することなく
生まれた子を死の恐怖に渡すこともない。
彼らは、その子孫も共に
主に祝福された者の一族となる。
- 24 彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え
まだ語りかけている間に、聞き届ける。
- 25 狼と小羊は共に草をはみ
獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし
わたしの聖なる山のどこにおいても
害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。

【使徒書日課】使徒言行録 13章26～31節

²⁶兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなたがたの中にいて神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました。²⁷エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めることによって、その言葉を実現させたのです。²⁸そして、死に当たる理由は何も見いだせなかったのに、イエスを死刑にするようにピラトに求めました。²⁹こうして、イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。³⁰しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。³¹このイエスは、御自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日にもわたって姿を現されました。その人たちは、今、民に対してイエスの証人となっています。

【福音書日課】マタイによる福音書 28章11～15節

¹¹婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。¹²そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、¹³言った。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。¹⁴もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」¹⁵兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。

《空の墓》の出来事【こども説教のために】

最初のイースターの朝、女の弟子たちが主イエスのご遺体が納められているはずの墓で見たのは、入口の石を脇に転がして、その上に座る主の天使の姿でした。天使は、「あの方は、ここにはおられない。…復活なされたのだ」(28:6)と告げ、空の墓を見るようにと仰うのです。続けて「急いで行って弟子たちに…告げなさい」と言われるままに、女たちは、仲間の弟子たちのところを目指して走って行きました。すると、ご復活の主イエスは、その彼女たちの前に現れてくださったのです。

女たちが墓の前で見た出来事を、同じように見ていた者たちがいました。墓を見張っていた番兵たちです。彼らは、空になった墓を見て、慌てて、そのことを都の祭司長たちに報告に行きました。ところが、祭司長たちは、彼らに多額の金を渡して、『弟子たちが…死体を盗んで行った』と言いなさい」と命ずるのです。彼らは、人々にそう説明するしかありませんでした。主イエスを知らず、ご復活の主にお会いすることもなかったからです。

わたしたちは、主イエスの弟子たちの教会を通して、ご復活された方を知り、お会いしています。そのお方を、空の墓の中に捜すのではなく、弟子たちから始まった教会の中で見出し、お会いさせていただいているのです。

「神は復活させてくださった」

世界中の教会が主のご復活を祝ったイースターの翌日、ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇逝去の報が、世界を駆け巡りました。昨日、世界中に中継された葬儀には、各国の首脳も参列されていたようです。もちろん、だれよりも深い悲しみの中に置かれたのは、カトリック信者の皆さんでしょう。わたしたちプロテスタントの教会では想像もつかないことですが、カトリック教会の皆さんにとって教皇の存在はとてつもなく大きいのです。教会という「信仰による家族」の家長としての存在なのでしょう。家族一人ひとりにとって、家長との距離感はさまざまであるとしても、家族を一つにする精神的支柱として、家長の存在は大きいのです。古風な考え方に聞こえるかもしれませんが、ヒトは何十万年も昔から、そのような「大家族的な共同体」の中で生きてきたのです。それは、思想によって簡単に換えられるようなものではありません。遺伝子レベルで受け継がれていることなのです。

イースターの祝いの中で、多くの教会が、新しい「信仰による家族」を群れの中に迎え入れています。わたしたちの教会も、受洗者と転入会者を一人ずつ、新しい「家族」の一員として与えられました。

古い教会の伝統では、イースターに洗礼を受け、新たに教会共同体に加えられた者は、それから一週間、次の日曜日までの期間を、「信仰による家族」と共に過ごし、「神の家族」の一員としての振る舞い方の初歩を学んだと言います。現代の教会では、そのような習慣はほとんど廃れてしまいました。けれども、その意義は忘れられてはならないでしょう。

洗礼を受けたばかりの者は、「神の子」として新たに生まれたばかりなのです。人としての年齢に関わらず、「神の子」としては新生児、乳飲み子にすぎません。生まれたばかりの子は、すべてのことを、親をはじめとする家族の者が世話してやらなければ、一日たりとも生き延びることができないでしょう。放っておいてはいけません。その子の命が守られ、一人で生きていくことができるまで成長できるかは、家族にかかっています。わたしたち「信仰による家族」には、新しく生まれたばかりの「神の子」の命を守り、独立できるようになるまで世話をする責任があるのです。それは、しかし、わたしたちにとっては、喜びとなるでしょう。子育てとは、そういうものです。家族として共に歩むとは、そういうことです。

それにも増して、わたしたちは、新しく生まれた「神の子」に、ご復活されたお方を見る喜びを与えられています。イエスを死者の中から復活させてくださったお方は、わたしたちの間で新たに一人の人を死者の中から復活させてくださったのです。一人の人を、決して墓の中に見ず、死者の中に数えず、新しい命の交わりの中で憶える家族の一人としてくださったのです。

《ご復活》の証人となる

わたしたち「信仰による家族」の群れの一つで、一人の「神の子」が誕生するイースター礼拝の洗礼式には、多くの方が立ち会って下さいました。教会員の皆さんだけでなく、主のご復活を祝うためにおいでくださった方も、少なからずいらしたようです。少し残念だったのは、子どもたちの多くが、洗礼式の前に退堂、解散してしまったことです。「こどもの教会（教会学校）」に来る子どもたちには、以前からの習慣で、活動時間を 9 時から 10 時半までと案内してきましたから、一部制の合同礼拝になってからも、前半だけを子どもたちと共にする変則的な形を取っているのです。礼拝の終わりまでを「こどもの教会」の活動時間として案内したら、果たして今まで通り子どもたちは来続けてくれるだろうかと、余計な気を遣ってしまっています。それでも、祝いの日や洗礼式の執り行われる礼拝では、最後まで残るように、子どもたちには呼びかけているのです。子どもたちに、洗礼の出来事をぜひ見て、聞いて、体験してもらいたいです。

「空の墓の出来事」を経験した女たちは、主の天使に促されて、その経験を仲間の弟子たちに伝えようと思いました。主イエスが、「死者の中」ではなく、自分たちの歩みのただ中に共にいてくださる方であることを、自ら経験した証人として、伝えようと思いました。

わたしたちも、伝えたいのです。今までわたしたちの生活の外にいた一人の人が、わたしたち「信仰の家族」の中で新たに「神の子」として生まれた出来事を、この目で見、この耳で聞き、この手で触れる経験をした証人として、伝えたいのです、わたしたちのすぐ近くにいる者に。神が、わたしたちのすぐ近くに置いてくれている者たちに。子どもたちに。

さもなくば、どうして、その人たちを、わたしたち「信仰の家族」の中に本当に迎えることができるでしょうか。「胎児」のままではなく、洗礼によって「家族」の間に生み出され、はじめは乳飲み子であっても、いずれ独り立つ者になるまで共に生きていく者として迎えることが、できるでしょうか。

「空の墓の出来事」を見聞きしても、ご復活された方とお会いするようにならないならば、残念なことです。「神の子」として新たに生まれた者を見ることのないならば、何を得ることがあるでしょうか。「信仰の家族」に生まれた「神の子」を見ても、「あの人は、弟子たちの教会に盗み取られた」としか語れないとしたら、それは悲しむべきことです。

そのような人のところにも出て行って、わたしたちは、語らなければならないでしょう。証人とならなければならないでしょう。ご復活の証人、「信仰による神の家族」に新しく「神の子」が生まれたことの証人として、わたしたちは皆、語り、証しし、命の交わりの喜びを告げ続けるのです。